
私と先輩

らいか

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と先輩

【Nコード】

N4354I

【作者名】

らいか

【あらすじ】

まだ、間に合いますか？

私と先輩――

いつからだろう

戻りたい、戻れるかな

ムリだよね

私、河合彩音（１７）と
後藤拓（１８）は幼なじみ

だった

中学までは毎日一緒に
登下校してたし

お互いの家が隣同士
つていうのもあって
暇さえあればどちらか
の家に行き来してた

本当のお兄ちゃん
みたいで大好きだった

でも、私が中2の頃
先輩に彼女が
できて、私は先輩と
関わらなくなった

その時私は初めて、
先輩のことが
好きだったことに
気がついた

それからお互い
関わらないまま
時が経っていった

私が入学した高校は
偶然にも先輩と
同じ高校だった

だからと言って
一緒に行くわけでも
学校で話すわけでも
ないんだけど

「ばいばーい」

『ばいばーい』

私在家へと続く道を
歩いていると前方から
見覚えのある姿

と、犬

犬？

どう見てもうちの犬

でも散歩してるのは
先輩なわけで

よくわからないぞ？

拓「よー」

『どーも』

拓「お前最近散歩
サボってるんだって？
おばさんと偶然会って
任されちゃった（笑）」

『なんか、すみません
私やりますよ』

拓「別にいいよ
どうせ暇だし」

『じゃあ、お願いします』

拓「おー」

先輩は歩いていった

私も家に向かって
歩き出した

『ただいまー』

母「おかえり

今日拓くんに会ったよ」

『知ってるー』

母「久しぶりに見たけど
成長してカッコ良くな
ったわねえ」

『知らないよ』

私は部屋に入った

知らないよ

もう関係ないんだから

学校ですれ違っただって

登下校中に会っただって

お互いスルー

だったじゃん

もう同じ高校の

先輩と後輩でしかないよ

コンコン

拓「あやー」

はっ？！先輩！？

『はい』

拓「入っていい？」

『いや、あの、どうぞ』

ガチャ

拓「おじゃましーす
うわー懐かしー
全然かわってねーな」

『どうしたんですか？』

拓「へ？」

『いや 用件』

拓「用事なきや
来ちゃ悪かった？」

『え、あの
悪くないですけど』

拓「けどなに？」

『いや別に』

拓「今日親いないから
夕飯こっちで食うの」

『そうなんですか』

拓「てか何で敬語？」

『え？だって先輩
年上じゃないですか』

拓「何だよそれ」

『え？？』

拓「もういい、帰るわ」

『は？何で？』

拓「何？先輩って

まじ意味分かんねえ
前だっていきなり
関わらなくなるし
お前何がしたいの？」

『
っ
』

拓「じゃあな」

先輩はそう言っ
て出て行ってしまっ
た

先輩が言いたい
ことは分かっ
てる

でも過ぎた時間は
戻すことなんてできない

もう 遅いんだ

ガチャッ

母「あや、拓くんと
何かあったの？
悪いことしたなら
ちゃんと謝らないと
ダメだからね」

『 何もないよ 』

母「本当に？
じゃあこれ届けてね
いらないうて言ってた

けど、お腹減るだろうし」

『自分で行ってよ』

母「うーるーさい
さっさと行きなさい」

お母さんこえー

そんな母親に
少しビビりながら
私は家を出た

と言っても

そう簡単に彼の家に行けるはずもなく

私と彼の家の前を
うろちよろしていた

母「あんた何してんの！
変な人に見えるから
早く届けてきなさい！」

すみません

私は思いきつて
先輩の家に入った

キッチンに置いとけば
いいよね？

先輩は部屋に
いるだろうし大丈夫

『よし』

キッチンに置いて
帰ろうとしたとき

ふと思った

『私何してんだろ』

そう思うと勝手に
涙がでてきた

申し訳ない気持ちと
戻りたいという想いと
もう遅いという現実が

今更になって
苦しくなった

拓「何でお前が
泣いてんだよ」

『っ ごめんなさい』

拓「それは何に対する
ごめんなさいなわけ？」

『っ』

拓「ほら」

『あ』

先輩がくれたのは
ひとつの飴玉

昔から私が泣いたとき
いつもくれてた

『 ありがとう 』

拓「呼んでよ」

『 へ？ 』

拓「前みたいに呼んで」

『 たつくん 』

拓「やっぱりそれがいい」

『 ごめんね っ 』

拓「もっいいいよ」

『うう たーくんっっ』

拓「いい加減泣き止めよ」

『だって』

拓「ったく」

たつくんはそう言っ
て私の頭を撫でてくれた

私はいつもこれで
泣き止んでいた

拓「俺だつて
泣きたかつたんだぞ」

「え？なんで？」

拓「急に避けられるし
今日会つたと思つたら
敬語だし先輩とか
呼ばれてるし
かなりショックだった」

「だつてたっくん
彼女できたから」

拓「すぐ別れたよ」

『別れた？』

拓「お前のほうが
よかったから

俺、あやのこと好き」

『え』

拓「あやは？嫌い？」

『嫌いじゃないよ
私も大好きっ！』

拓「また泣くし」

たつくんは優しく

抱きしめてくれた

幼なじみから
恋人同士に変わった
瞬間だった

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4354i/>

私と先輩

2011年1月27日11時33分発行